PR ©日本商工会議所

JICA ジャイカ

PROJECT REPORT Vol.3

タンザニアに近代養蜂技術を導入して収量アップと雇用の創出に挑戦

東アフリカに位置し、豊かな大自然に恵まれたタンザニア。農業を主要産業とする同国は、年間約3万トンの収量を誇るアフリカ第2位の蜂蜜生産国で、長年にわたり伝統的な養蜂が行われてきた。そこへ近代養蜂と蜂蜜加工技術の導入を目指しているのが日新蜂蜜だ。同社は、2021年よりJICAの民間連携事業を活用して基礎調査に乗り出し、蜂蜜と農作物の収量増加や小規模農家・養蜂家の収入アップに向けてチャレンジ中だ。

アフリカ有数の自然を誇るタンザニア。蜜源となる植物も多い

現地の養蜂家に近代的な養蜂技術を教える小林勝海さん

近代的な養蜂技術でハチミツの収量も4倍に増えた

新たな輸入先を求めて タンザニアでの基礎調査を開始

東アフリカに位置するタンザニアは、日本の約2・5倍の国土面積を持つ農業国だ。また、年間3万トンに上る蜂蜜の生産量を誇り、アフリカ第2位の採蜜国でもある。しかし、気候や花の蜜源などを考慮すれば、さらに収量を増やし、品質も向上できる可能性を秘めている。タンザニアが持っているポテンシャルの高さに目を付けたのが、日新蜂蜜だ。

同社は岐阜県に本社を置く、国内シェア第2位の蜂蜜総合メーカーだ。国内産のほか、南米や東欧など15カ国から蜂蜜を輸入・販売していて、海外産は販売量の約9割を占める。

「従来、新規原料の多くは海外で買い付けを行っていましたが、コロナ禍で1年以上、渡航ができませんでした。その上、巣ごもり生活で料理に使う蜂蜜の需要が増加し、価格も高騰。新たに安全な供給先を見つける必要が出てきました。そこで着目したのが、日本ではあまり知られていないタンザニアです」と同社社長の岸野逸人さんは振り返る。

しかし、過去に同社はアフリカから蜂蜜を輸入した経験がなかったため、JICAの民間連携事業を活用して、2021年3月よりタンザニアにおける養蜂の可能性を探るための基礎調査に乗り出した。

蜜源も多くミツバチにとっていい環境であることを確認

調査にあたって、同社が掲げた目的は主に4つある。タンザニアの養蜂の実態を把握すること、農園の規模を確認すること、同社が導入しようとする技術に現地のインフラが適応するかを見極めること、そして現地のカウンターパート探しだった。

「調査を開始して程なく、タンザニアでは古くから受け継がれてきた養蜂が今でも行われているために、収量が少なく品質も低いことに気付きました。しかし、私たちの持っている近代養蜂の技術をもってすれば、それらを解決できると考えました」と、現地で調査を担当してきた同社取締役の小林勝海さんは説明する。

また、現地では農園が養蜂に活用されておらず、受粉が十分とは言えない。そこで小林さんは、巣箱を置いた農園と置かない農園では、どれだけ収量が変わるかを比較する調査を実施した。

「実は、かつてミャンマーでも同じ調査を行いました。ところが、巣箱を置くと集まってきたミツバチが作物の栄養を取ってしまうと誤解され、なかなか協力してくれる農園が見つからずに苦労したんです。その点、タンザニアでは、収量が増加するという調査結果があり、また、JICAの仲介で政府機関が農園への養蜂導入に協力の意向を示してくれており、スムーズに農家の協力を得られるのではないかと考えています。」（小林さん）

そのほか、巣箱を運搬するためのインフラ調査や、エリアごとの蜜源調査も実施。雨季でも巣箱が流されないよう土壌の改良が必要だが、蜜源は多く、ミツバチに適した環境であることが確認できたという。

一方、苦戦したのは現地のミツバチの性質だ。アフリカに生息するミツバチは、ヨーロッパなど他地域と比べて攻撃性が高いのだ。ミツバチが強暴だと刺されるリスクも高くなり、農家も及び腰になってしまう。そこで今後3カ月ほど掛けて、交配を繰り返し、攻撃性を弱める取り組みを行う予定だ。

現地で養蜂から製造まで一貫したサプライチェーンを構築

22年6月に基礎調査を終え、蜂蜜の収量は伝統養蜂の約4倍、授粉促進でヒマワリの種の収量は2～3割増、その種から搾った油の量も5割増という上々の結果を得た。今後、近代養蜂を普及することで、現地農家の収入増加や雇用の創出が大いに期待される。さらに、同社にとっても魅力的な輸入先となりうる確かな手応えをつかんだと言える。

「現在、日本の蜂蜜メーカーは輸入商社から蜂蜜を仕入れ、それを瓶詰めして売るのが主流です。しかし当社は、現地での養蜂から製造までを担う一貫したサプライチェーンを構築していきたい。コロナ禍で現地へ社員の派遣など思うようにいかなかった部分もありますが、目標に向けて前進できたと自負しています」と今回の調査を評価する岸野さん。

次なる段階に向けて、同社のチャレンジはまだまだ続く。

日新蜂蜜株式会社
代表取締役社長　岸野 逸人

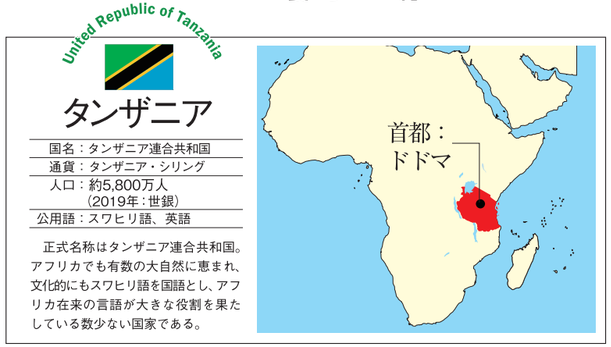
1975年6月30日生まれ、岐阜県出身、47歳。2020年2月に代表取締役社長に就任。「『タンザニア・プロジェクト』に参加したことで当社への就職希望者が増えました」と意外な効果もあったという

同社は、蜂蜜をはじめ、ローヤルゼリーや食料品などの製造販売、医薬品の製造を行っている蜂蜜総合メーカー。現在世界15カ国から蜂蜜を輸入しているが、新たな採蜜国の発掘にも積極的に取り組んでいる。

案件名

タンザニア国養蜂ビジネス構築のための基礎調査
2021年3月～2022年6月

貢献するSDGs　農業



第８回アフリカ開発会議〝TICAD８〟2022年８月開催

TICAD（アフリカ開発会議、Tokyo International Conference on African Development）は、アフリカの開発をテーマとする国際会議で、日本とアフリカ、国際社会の指導者が、アフリカ開発のあり方と具体的な取り組みを議論・合意する国際フォーラムです。

今年のTICAD８は、８月27日･28日にチュニジアをホスト国として開催予定です。2016年に実施されたTICADⅥのケニア開催以来、２回目となるアフリカ開催となります。

TICAD８には、アフリカ各国の首脳や、日本からは岸田首相が参加予定であり、また、日本とアフリカ双方のビジネスリーダーが参加してのビジネスフォーラムなども開催予定です。

JICAのアフリカ協力については、JICAのTICAD特設サイトや、ウェブ版広報誌 JICA Magazineにて詳細を掲載していますので、是非ご覧ください！

JICA 版 TICAD 特設サイト

JICA Magazine 6 月号